雲國歌集 上

蘭說辨惑序

蘭說者何。喝蘭之說也。喝蘭人之所說與人之說喝蘭也。今衆人之說喝蘭也。妄常以喝蘭訴病。曰其人無踵。曰其域無壽。諸若此類。率皆庸俗所口無稽之言。雖未足以深責。薦紳碩學亦往往之其所弗知而辟焉。狃而不察。雜然槩以爲穿胷跂踵之儔。亦坐不能自讀其書而徒吠聲傳虛故

此書ハ和蘭物産ノ名称ヲ小書ニ和漢ノ名称ヲ大書シ其形状ヲ図ス
来舶後来信ヲ以テ図ヲ加ヘ或ハ解説ヲ加ヘ其人ヲ詳ス
且ツ器物ヲ不會熟要ス 世人略説ノ誤ヲ傷ム

蘭國通覽 全

洞津堀西 幽蘭齋藏板

蘭國通覽序

蘭說者何。喝蘭之說也。喝蘭人之所說與人之說喝蘭也。今衆人之說喝蘭也妄常以喝蘭訴病曰其人無踵曰其域無壽諸若此類率皆庸俗所口無稽之言雖未足以深責薦紳碩學亦往往之其所弗知而辟焉狃而不察雜然槩以爲穿胷跂踵之儔亦坐不能自讀其書而徒吠聲傳虛故

耳雖則云爾於學業何與則磐水子豈屑
爲之詹詹之瑣瑣者哉言以止言乃言已
蓋其操心以爲人之有技若已有之才能
術智何必出諸已然後愉快且人各有量
事不可兼壤之碩鼠何苦不多其又以身
爲五技也苟獲其人而教育之俾人人學
焉而成其才所近以供
國家仁民之用則庶幾萬一有以報答

昇平之鉅澤乎是以非其執殳事以朝夕
於君及夫五味五藥以待有疕瘍者造焉
而攻乎斯瘳乎斯以嘗其技也未嘗不研
精覃思密勿從事於其學矣於是從學焉
者質問焉者四方鳩集遐邇麇至殆茶然
乎叩竭者日甚一日猶且小鳴大鳴縣鐘
之應擊待其從容然後盡其說面命提耳
諄諄乎不能自休豈所謂明鏡不疲於屢

照者。非邪。雖其性之純至使然哉。距非學之博而積之富。贍何以能至於此哉。唯其志之剸乎教育。而汲汲於進學成業。至不急之問無用之辯。若無踵無壽之類。則以爲無益。不欲數答之。二三子亦居恒苦渴其不間請益也。不欲數失時。乃爲筆録是編。以禦彼輩其卑言儕俗。不甚高論。職是之緐。嗚呼。磐水子豈屑爲之詹詹之瑣瑣者哉。言以止言。乃言已。夫然後乃今先生有以省無用之辯。弟子有以得請益之間。而世之讀是書者。有以免龍吠聲傳虚之跡矣。一舉而三善皆得者。而且所不屑爲也。則他日所欲有爲者。其將不測夫。

槐園　宇田川玄隨晋

附言

此編は我　駕水先生ある頃小子元晃等の問ひ
に示さるゝ所の説話かりそめ　河茶池（かちんざ）
我　邦　了　中茶加比丹（ちゃかぴたん）の科学は未だ伝ること少く海内
ぼつ〳〵ちゞひ〳〵ゝ世に行はれ或は其波来の
薬品器物（やくひんきぶつ）の数〳〵言あやまりを少からざるを
ひとわ〳〵辯（べん）じ　ふ　こと

一先生傳て和蘭醫書翻譯の業を始めて專つの
書を譯定し同業乃ち伝へ知て世間目を
喝て驚かんとせし傷らむ所の蘭學階梯・
六物新志・蒙求・蒙喝・揚芳・及び此編等の譯書を
ふる生徒なりといふ
一こ後て加るに連友・日を重ね同好此法を含し
赤家を講習し後業を誘ひ来ること多く先先
乃創立する此業を仕ぎ社中を設て門人を
欲する社志かり生徒を集連絡せしめて十数
年ふるを待くらしく教導おこなることかし
後て所生は群芳藉ふして子星書を授
して新問ふることのあり筆を員て熟て少
ゆるを学ぶものあるを且官勢と治業をもつて和来
西て奔走し家て有る所を病家は膳あり
元宅の座表あるを以て備為端ことく お様りかと
んど遊所て居ることあり ぞさて生来り舎する

同終の法生屋こしまさ氏毎に世用不益のこ
とをおもひ同氏先生の勤業をさゆさがるるものを
くかうるを先生寸法を甘しむ孫をかしこ後
をいとふといへども博覧にしてよく人をいを毎
件(けん)ごとに後をさ者を小ふを考に倣み侍
して所の大業を修(をさむ)るの妨をいとふ一家所の写
展しの山をうづひ氏編の教授を筆(ふで)校しふ
後に此一部を求む頃に後を校(こう)しふ法て二

冊とかしに云ふ蘭説辯惑と題し法国の
名士者とかすこ後京(きょう)伯(はく)所にをるの寸表
なり
一 全編の法件(けん)ふかを器法よして詳(くわし)
きるものを別に名物(めいぶつ)譯文(やくぶん)を加をを
あるべなり志ある士を生書を請ひ得て分り
此編に国を博治の士に示のるの所のるの
ぶ志の後ごとの初ざる所よりて先達(せんだつ)し

頑愚を集め人をいましめ
わるぎるんをいましめ

安政二乙卯仲春朔日

丹波　馬元晁誌

目録

巻之上

○和蘭國名　○短命
○眼鏡　○ぶんぶく酒
○硝子弁圖　○むかの弁図
○うんてう　○さうけ
○おてとの　○ぢん
○駝鳥　食火鶏弁圖　○ぶつく

○みそ・うふかく・ねぎ・しいたけ・きくらげ・きゆうり
○ぶうべる
○ぶんかつふ・ぶんれんろふ・わんだやぐら
○おくさ・うんきりの弁図
○ちゃいんでん草
○ふかひる・ぎやゆん
○わめんどふた
○ほうとうる弁図

○こんぶふよ
○きやぼん
○てきめんていな
○ぼうとる
○けうてこぶ
○あん屋 樹茶湯
○ねいきゝだき
○食料
○うんぷんや
○ゟ者 法性筋湯
○くうん坊
○ちもきろ
○殺活車

○写生撓画法　○外降水弁圖
○らんせいて・だんどふさ
○入津の始并長崎旅館　○紅毛人来朝及交易
○糸白丸三名　○外科
○ゆんぐ　まるが　ゆ　大畧并世界畧図

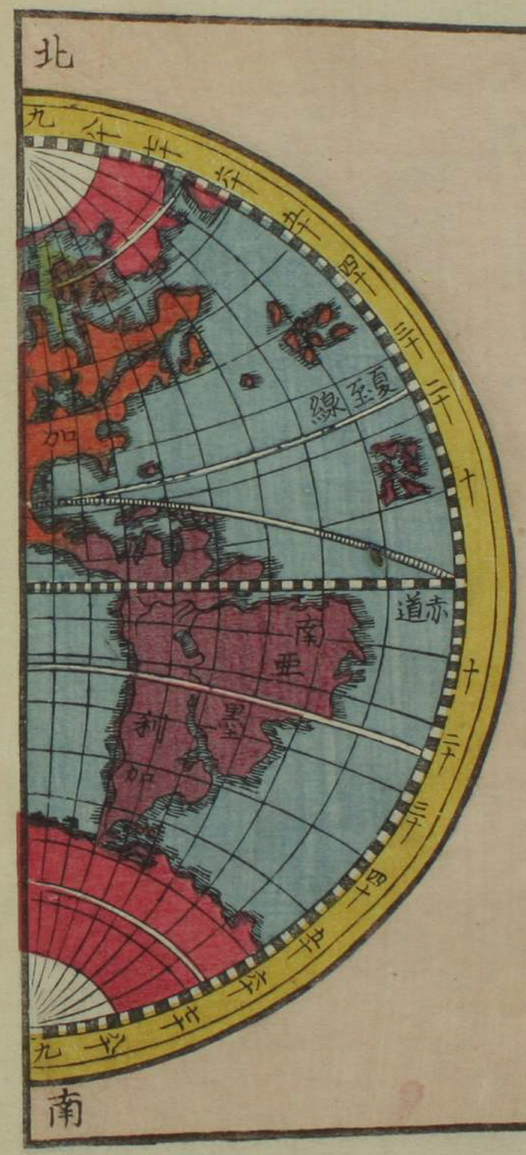
上下總計　四十六條

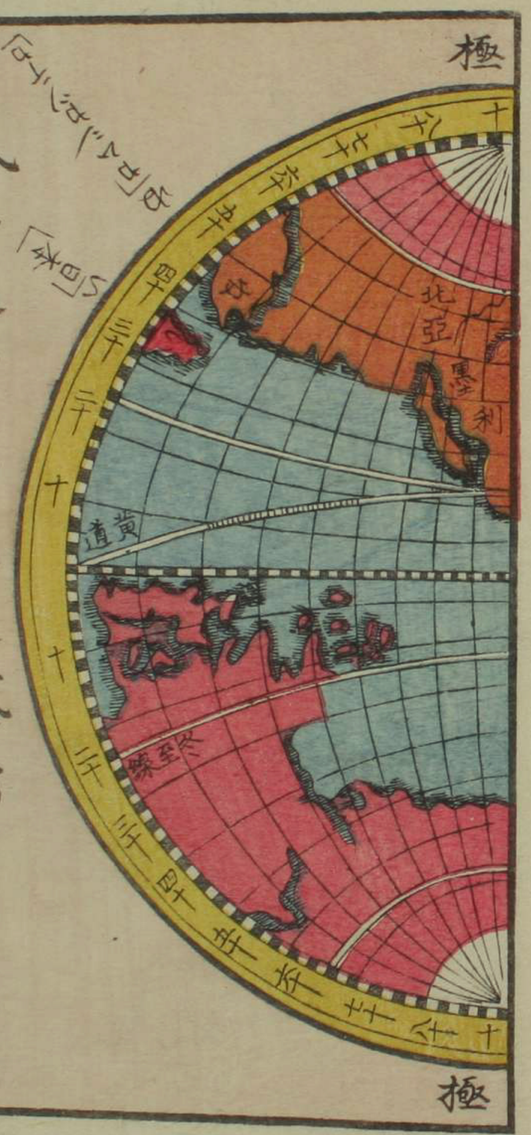
同治く後

阿蘭陀國人扇

極
亜弗利加
黄道
赤道
極

地球畧全圖
赤道
南





戊午之冬為支人越邨子虛寫
於江戸客舍岳山川邑

同女子圖

同裸體圖

同女子圖

右乃四場ハ蒙古人ハ画ヲ所ヲ
掠ヲ奪ヲ殺ヲ焼ヲ亡ヲ出ヲ其ノ外文ヲ
いさゆる膝ヲ屈伸瞳ノ色ヲ変ヲ赤ヲ
ヲ淫ヲ行ヲ狂ヲ乱ヲ示ヲ者ヲ
と本文の辯おくともうるの器
を拭しもと彼高徳をうくだし國
さとなるとバ衣作張ヲ成美ヲ者ヲ殺骸
奥ヲ豈ヲとヲ成ヲ者ヲ

ゆくゑうとうをしるす最禄骸乃器ハ
彼方の名醫「こいてる」なるものわ
ゝを解骸書中ニ載する所乃
其像器々ものをうつし彩
繪茶末地器ハ乃法器も亦ことゞく
ゝ業書中ニ見ゆる東洋ものあ
て一を私に製ひるふわゝすゝ乃
ものこれを思へ　源孫平志毛

蘭國通覽卷之上

磐水先生口授
門人　福知山醫官有馬元晁文仲筆記

○阿蘭陀國名

問て曰「おらんだ」と云文字世間通用す紅毛又ハ
阿蘭陀と書るハ正字なるや又別に文字

ある事しるべし

此まことごとく漢字を用ゐる國にあるべき字體

なれども業を諸侯にしてこれを詳にせざるべからず

正字あるべき筈なり元来「サランダ」といふを

「ラランド」といふは此地にある阿蘭陀といふ字を

清人は音譯字なり唐音讀にしたがひて蘭沈

なるべしとの正音にあらず明人は和蘭・喝蘭・荷

蘭・甲蘭などの法蘭得亜などいふ字を音譯したり

今は清商は何蘭と稱せずして紅毛紅夷か

ぐ稱するは語なり文字なり此名を稱するは此国人

を指してなりわるべきなり詳にして新井白石の

生采記異などにいふ書にて辨じ出せるなり

○短命

甲くいちくいの紫北人行きて短命なりと世人の

唱ふる事なり実に然る所以ある事なり

されば曰此説行はれて起きたるやを所由を考へ人生考

天地に賦して渡世界に出ぜし國いづれも
地とゝふらとしうるわるべきやうなれども
もやはくゝ同じ事なれども其中に海
濤数万里航を事とする人は殺害をもの
大海原に出ふして終るといふ義も後海万里に大
洋乃奇濤を犯し幾何百日といふ所にかくなりぬ
きびしかるその苦しくしびの辛楚難勞わやうを
変きやうわふ事を数へ尽くしがたしこゝに世界

を船底乃みくづとなるのうれ涙にて魚腹葬らる
かゝ心を冷し魂を消す事数、のべうをうさ事
なるべし百里二百里は海波をもうさへと事く
船をしばめ貨物を投じ命をうしのふ事いく
度のきわる事いうんや東西数万里の
の風波を三ぬきく住さ事なきでさと
わるべきうしうん命を我ゆゑや母京を離く
ちる人を初めて日本を老ひ又いき

の旁ら杖を引てたち篤きしつるを動く終に
たち起ちうろたえて手をうち果て老年市れ勢
仮名〻ど杖を虚空へ又数百日紅中れたるわが
身ど海上れ痛を感じ北はづ方伴ア山
ちこわるゆえなるんうち先年江戸へ参く板橋と
かし「色いと」と云「びん」かくとうろたえて
色初れたるしかく笑きり抜ぢ出へ来る
人くとたうり宋二年二三廿実かと、へうが年

お度とたゆ年出とある人を出方に行のたつか
く寿夭短長をひくしどもあるゆえ百年共に年
を保つとあり又十年三十年あるかれ去秋をうて
終るとあり少ふし

○眼なし

四ていく和蘭人を乙質眼かしといひあるゆえ眼目
と高鼻のごくしいひ申を彼れ人長大かうしいく
実てい和ら

表ていく口高流行ようて

起きるや彼人の眼中些あれ人とも頗る矣かる表面
類のごとくにて目もきるるや大海を見ふるる者の
歐羅巴地方の人を象亜細亜の人とも多く様相異なること
なるあるまことに異なるものなれば人ものおのおのなる
用をなすを所まとして又ふしぎなる地陽
甚んで元来人黑坊といふものとなるべし眼體稍異か
つ清人韓人琉球人若かしこ作へ人なるあり同し
國内の人なりと東奥北越四國筑紫の人くらべらるく

眼のようなるものおのおのさまで少し
げ者の名と起きるものあるものを運用と
なるをみる同じ事なるいろんや一萬里外大洲
と考へるるを人よおのおのや同じ道化の所為なる
ども國土方域ありて少しの所為なる者
ありて又眼を一方の基立ある所眼なるものとなて
起行もべきや論もし及ぶ事なるの又彼人ものなて長
大なるものを沢へ来るる三人の勢をもんてかく

いしをるうやうなれども長短ありて一定ならざるなり大坂の和蘭人とりんきるの
いろいろあるを彼江戸糸向しきるに「りんきゝで」といへ
る「びらん」なる人長さ五尺ばかりなるを張て云々うるさきものし彼人も
菊地の表張て云々きるものなきを本邦人も
かくぞ長き事なれども紀きりしたんゆるなり日彼人尿をる
小絲んで片足とわぐふらゝ犬乃ごとしとゝひ房中乃
(ホ)多くいろ〳〵煎菓を旅をとゝのへ新一向をとゝのぐ

き板となさき方法なり

○葡萄酒

向くいろ〳〵酒あぶぐり酒阿剌吉珍酡など色〳〵
あるとゆゑ製法いろ〳〵あるなり　其日和
蘭人酒を多く法出きる買おしまるゆゑ多し
てうぶぐりもて釀しきるものなり製法
てきるくいろ〳〵あれども酒乃こゝとを「ぶいん」
とふ葡萄を「うぶいんぐあるぐ」とふ器

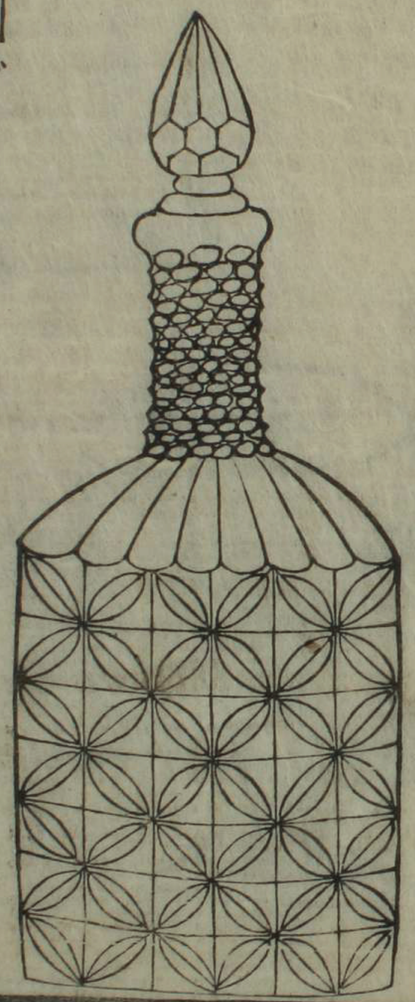
て称し、さらに名づけて秋山とぶどう酒と製し、また名を秋山波国酒の種類とす。勝しとなりぶどう酒、さらに五加かくがごとき製法また名を秋山と称し、又酒を「ぶいる」と表し、また酒の食物を「ぶるとめて」飲食の消化をなすものという。米をもって製し、さらに酒を絞りかすを

○硝子諸器

問曰和蘭製の硝子の器数を世すべて皆「らっぱ」という。ひ酒入の類を「らっさと」といひ又硝子をびいどろという。答て曰、硝子をもわれわれ和蘭語にてはらっぱ羅甸語にてはびいどろ波尔杜瓦尔国の語にてはびとろと称す。彼国の紅毛人はまたこれを称して「ぐらっさ」という。

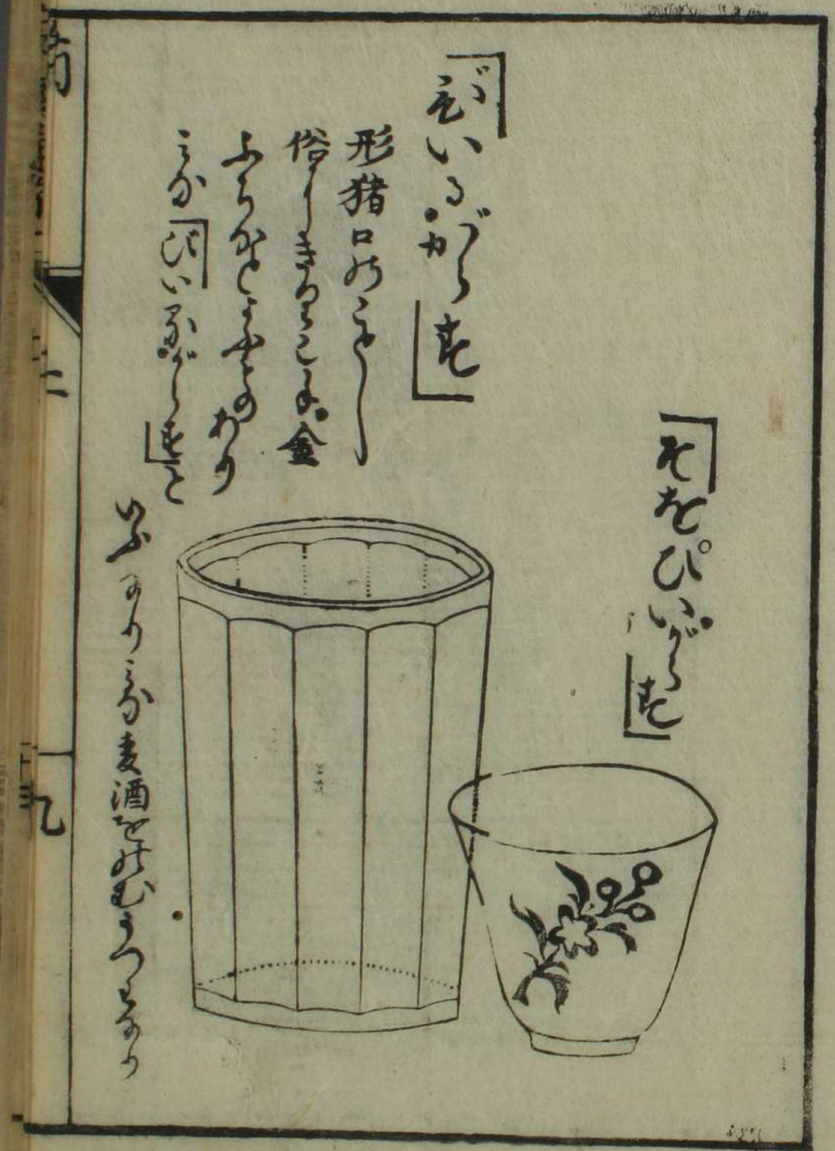
「ゆうあり」一名「かゝつてでるんきぢつける」

二合五タヤど入



「ごるげまたて」


口三寸
此辺ゆて酒をそぐきし上ゝ
水を加へ暑中おゝ用ゆ

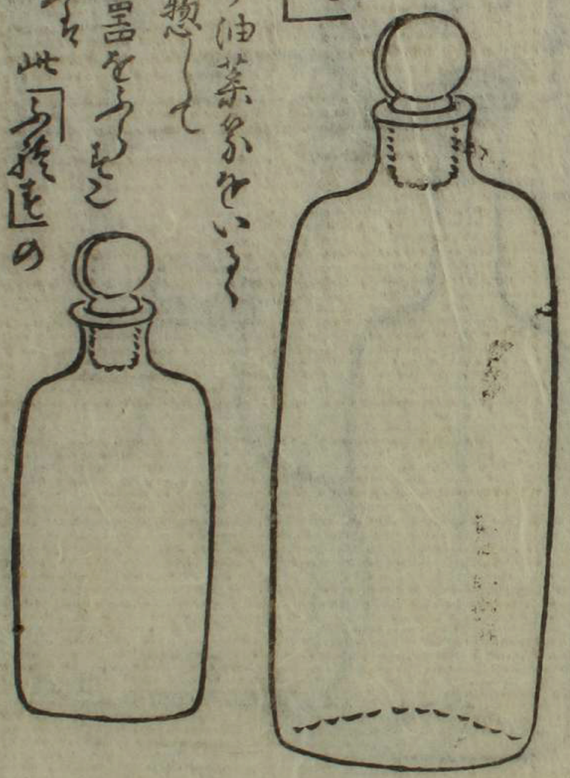

形猪口のごとく
俗にまること金
ふくろとものかり
ふる
麦酒をのむうつわ

「けふきい」

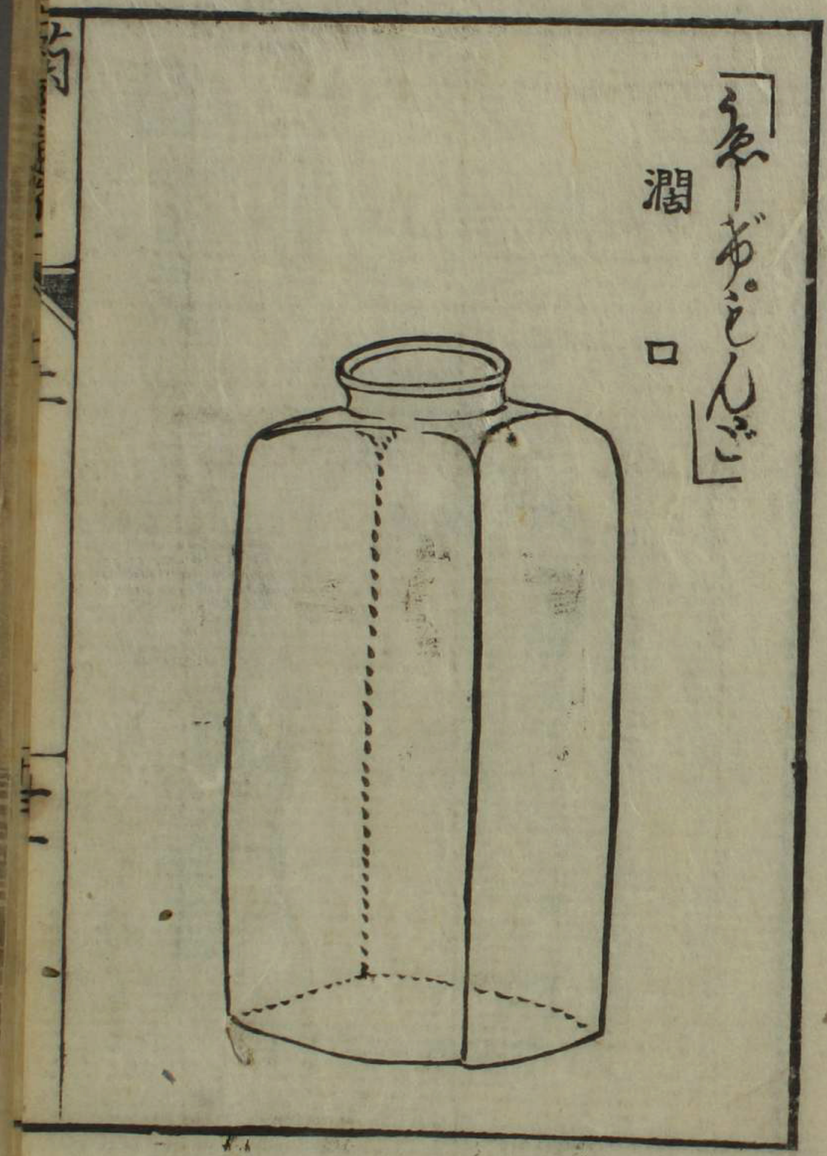
形状大小種々あり
俗間にてこつぷと云

「ゆまし器」

大小あり油茶ふせいこ
ものし物して
硝子器をもつて
とりあつ
此「ゆまし器」の
かやうなるかたち




圓
ろんでぼつとる
俗ふくろを丸くしたもの
長
らんがぼつとる
俗ふくろを
長くしたもの
五合くらゐ入


ぐちんご
潤口

「あーるがん」

やきふく
「ピパわ・あること」をもつて
水を入れる器

「ぬるを」を多くは硝子製又は「ぶりきの」を
「きりこ」といふ木皮を作りたる口なしの袋を
「ぶろつぽ」といふ「きりこ」は抱香といふ名南方草
木状より出づる柔軟にして鏤口へさをさしく
固密なるものし
「こりぽ」といふは元茶碗ぢくなるものをいふなり
今世多くは「けきい」と称せり
形よりいろいろ名あるもまた名

「ゆれもく」は方言にて藻の類なり油菜名酒かどいろく硝子器といふもの諸圖とおなじてらせとおもひをりをもしるべし

○くあゝの

問曰和漢細工は小刀は方言「くあゝ」といふ名なり

答曰「くあゝの」とは釣れもくなり世にいふ「くあゝ」を「きふいぱ」といふ「きふいぱ」は樞機の事「りも」を刀はくとなり